
とある次元の機動兵装（ドラグーン）

dragoons

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある次元の機動兵装^{ドラグーン}

【Nコード】

N1735P

【作者名】

dragoons

【あらすじ】

この世界はとある魔術の禁書目録であり、とある科学の超電磁砲でもある。

そして、とある次元の機動兵装^{ドラグーン}でもある。

「プロローグ」

「・・・もう、嫌だ・・・。やめろよ・・・。やめさせて・・・くれよ・・・。」

そんな呟きが洩れる。

辺りには、鼻を刺すツンとした臭いが広がる。

錆びた鉄の臭いとも取れなくはないが、その上から重なる腐敗臭がその考えを打ち消す。

そう。つまり、そこには死体があった。

そこは、『戦場』だった。

「プロローグ」（電撃使い） 7月1日

ある日、彼、神風生はとある大通りを歩いていた。

なにやら、上のほうで言い争っているような声が聞こえるので、視線を上方に移す。

そしたら、気の強そうな女子中学生が不良達に囲まれていた。

助けてやっかなー。とか思っていたら、突然ビリビリッ！という音が走り、不良達は倒されていた。

いきなりの事に驚く神風だが、ニヤリと笑って一言、

「面白え街だな。」

そっいいながら、もう夕焼けの空に去っていった。

第1話 「超独立機動兵装（ドラゲーン）と超電磁砲（レールガン）」

【電撃

もうお昼時を迎えるここは、『学園都市』。

東京都の3分の1の面積を占め、総人口230万人を誇り、その実に約八割を学生が占める街。

それが、ここ『学園都市』だ。

その街を、一人の少年が歩いている。彼の名前は、神風生。かなり整った顔立ちをしており、『学園都市』の外だったらアイドルなどの勧誘に引っかけたかもしれない。

そんな彼は何をしているのかというと、

（うつだぁー・・・）

ただ、やる気無く道を歩いていた。

ただ、やる気のない彼なのだが、なんとなく視線を少し上げてみる。まあ、そこに広がるのは普通の道だった。しかし、一箇所だけが『異常』だった。

信号機が着いていない。

もちろん学生が大半を占めるこの街とはいえ、車ぐらいいは通っている。

（ヤバイ・・・）

神風がそう思っていると、後ろから大型のバスがやって来る。

しかし、今左側からの車が出て来たばかりだ。このタイミングでは、間違いなくあの二台は衝突するだろう。

その状況を一瞬で理解した神風は、もう体を動かしていた。

バスが急停車する。しかし、それは運転手がブレーキを踏み込んだからではない。

それは、『能力』による働きだった。

この街では、こういった現象は外ほど珍しくはない。

しかし、バスのスピードはかなり出ていたし、そもそもバスの重量
じたいが重いのでこれを止めるには、かなりの『能力』が必要な
はずだ。

しかし、バスの前に立っている少年は、
指一本で止めていた。

（とりあえずなんとかしたな。）

ふう……。という息を吐きながら、神風は一人考える。

（まあ、怪我人もいなかったし、一件落着だな。しかし、学園都市
も意外に危ねえな。こういう所もしっかりしているのが売りなんじ
やなかったっけ？）

実を言くと、とある電撃少女が不良達をやつつけるために無駄にデ
カイ電気を使っていたのだが、もちろん神風がするはずも無かった。
まあ、いいか。と思いながら。またダラダラと歩き始める。しかし、
何かが神風の目に留まった。

帽子が落ちていた。確かさっきのバスの中の少女が被っていた気が
する。

普通なら、バスを追い掛けようとは思わず、そのまま道端にでも置
いておくのだろうが、

そんなことはできないお人好しの神風なのだった。

しかし、そのバスはある強盗事件に巻き込まれたりしてしまうのだ
った。

（さて、ここらへんかな……。）

なんと、本当にバスを追い掛けて来た神風は目的のバスを発見する。
また、どこかに行ってしまう前に追いつこうと神風は走り出す。

その時、真つ昼間からシャッターを下ろしていた銀行のシャッターが爆発した。

「はっ・・・？」

という間拔けな声を出す神風だが、すぐに気持ちを切り替える。更に走って近付くと四人いる強盗の内の一人を、ツインテールの少女が倒していた。

強盗の内の一人が舌打ちと共に手から炎を生み出す。

それを少女に向かって振り下ろそうとしたが、少女は攻撃を外させる為か、駆け出した。

神風のいる方向に向かって。

もちろん、少女は神風の存在に気付いていない。もし気付いていたら、違う方向に避けていたハズだろう。

強盗も負けじと軌道修正して炎を振り下ろしてくる。

瞬間、少女は『空間移動^{テレポート}』するが、神風は『空間移動』など出来ない。

そして、『空間移動』した少女はようやく神風の存在に気付いたようだ。遅かった。

炎が、神風に襲い掛かる。しかし、神風はただ左手だけを炎へと突き出し、

炎を一瞬でその場から『消失』させた。

驚く、強盗と少女だが、少女の方は迅速に次の行動に移る。

まず、強盗を押し倒し、次にスカートの下から現れた針を使い、強盗を地面に縫い付けていく。

あまりの事に、神風は見入ってしまった。

後ろから男と少女の言い争う声が聞こえる。その声を聞いて神風は、自分のやるべき事を思い出す。

すぐに後ろを振り返ると、男の子が連れ去られそうになっているの

を一人の少女が必死に止めている。
その強盗は、軽くその少女の顔を殴り、次は蹴り飛ばそうとしている。

そして、その強盗の蹴りが少女に叩き込まれる一瞬前、神風はその強盗の足を手で掴み受け止めていた。

そして、神風はこう言葉を紡ぐ

「あんまり気分の悪いモンを見せんじゃねえよ。俺みたいに初めてこの街に来た奴がイヤ感想持ちちまうだろ？」

そして、その強盗の足を持った状態で回し蹴りを繰り返す。

それが、こめかみに入った瞬間、その強盗の意識は途絶えていた。

どうやら、もう一人の犯人は、昨日歩道橋で見た少女がレーザーっぽいで車ごと吹っ飛ばしていたみたいだ。

そして、その少女がこちらへ歩いてくる。

大丈夫か？と、声を掛けようとした所で、その少女が

電撃の槍を飛ばしてきた。咄嗟に左手を出すとその電撃も『消失』した。

「・・・っ！アンタだれよ？」

少々驚いた顔をして言ってくる少女だが、

「誰よじゃねーだろっ！お前っ！普通の人間なら死んでるぞ！」

と神風は叫び返す。

「あー、もう、うるさいわね。別にいいでしょ死んでないんだから。」

「なっ・・・！」と神風は言葉に詰まる。どう考えても理不尽すぎる。

「とにかくっ！！俺は、お前らに危害を加えるつもりはねえ。」

「アンタには無くても、こっちにはあるんだっつもの。ていうか、一般人は事件に手出しちゃいけないのよ。」

神風はハアと溜め息をつく。

「しゃーねー。んじゃ、アレ使ってさっさと退散するか・・・。」
と言うと、神風の体がいきなり黄色、いや金色に輝きだす。

それを見た少女は警戒してコインを上上げる。

超電磁砲まで、あと3秒。

神風は、機械的なベルトを装着し、なにか携帯電話のような物を取り出す。

超電磁砲まで、あと2秒。

神風はそれに腰のホルダーからカードを一枚取り出し挿入する。

超電磁砲まで、あと1秒。

神風は、それをベルトの真ん中に装着し一言

「変身！！！！！！！！！！」

と叫んだ。

超電磁砲が発射される。それは、寸分の違いもなく神風に直撃する。

しかし、

そこから煙が晴れて現れたのは、

アンテナ

頭部に四本の角をもち、トリコロールに染め上げられた。ロボット

だった。

第2話 「転校生」 7月17日

「Looking! The blitz loop this planet to search way. Only my RAILGUN can shoot it. 今すぐっ!」

というアップテンポな歌を歌いながら、とある少年。神風生は歩いていた。

歩いている場所は、先日とは違い、学校の廊下だ。

「身体中を光の…速さで…駆け巡った…確かな…予感…。」

しかし、その声はだんだん小さくなっていき、終いには歌うことから放棄する。

そして、彼は頭を抱え

(うー……。大丈夫かな……。?ちゃんと友達とかできっかな……。?)

というような事を考えてクネクネしている。

傍から見ればかなり妙な光景なのだが、廊下には人は一人もいない。

それもそのはず。この学校では、今はSHRの時間だ。

そう。詰まる所、神風は『転校生』なのだった。

転校生というのは、意外と緊張するものである。勿論、ある『能力』を持つていること以外は普通の中学2年生、神風も緊張していた。

しかも、よりにもよってこの学校である。友達が出来るかどうかは大いに心配だった。

しかし、あくまでもポジティブシンキングな神風は、また自分のクラスに向かい歩き始めていた。

ハァー。というため息をつきながらとある少女、御坂美琴は昨日の事を考えていた。

（どうなってるのかしら？これで、アタシの能力が効かない奴があの馬鹿に次いで二人目・・・。）
そう。確かに昨日は、とある少年に電撃の槍や超電磁砲などをぶっぱなしている。

普通なら、死んでもおかしくはないが、その少年には死ぬどころかカスリ傷一つなかった。

そんな事を考えていると、となりの少女が話している内容が耳に入ってきた。

「やっぱりあの噂って本当なのかな・・・？」

えっ？あのウワサって？と聞こうとしたところで、担任が教室に入ってくる。どうやらSHRが始まるらしい。

クラスの中が落ち着いたのを見て、担任が喋り始めた。

「えー……。いきなりですが、転校生を紹介します。……………」

もう、みなさんも知っているかもしれませんが・・・」

と言って、担任が一呼吸おく。

「転校生は…………男子です…………」

と言った。クラスの中の大半が呆けたような表情になる。

それもそのはず。ここは、天下の常盤台中学。つまり、男子禁制の区域なのだ。

担任は、反論が出る前に抑えようとパツパと進める。

「それでは、紹介します。神風生君です。」

というと、扉がサーッと開く。

その様子を見ながら、

（上等じゃない。この男子禁制の区に一人で踏み込んで来るなんて

いい度胸してるわね。変な奴だったら一発で吹っ飛ばしてやるわ。」
などと美琴は考えていた。

しかし、入ってきたその少年の顔に度肝を抜かれる。

なんか、すごい見たことがある顔だった。っていうか、

「あっ！アンタッ！なんでアンタがこんな所にいるのよっ！」

「うげっ！ビリビリ少女。もといドツカン少女！お前こそどうしてここにっ！」

「ここが、アタシの学校だからに決まってんでしょうがっ！」

「スカートの下に短パン履いたお嬢様って……。うわっ！ゴメンナサイッ！もう何も言いません。」

というような、口論を二人で交わしていた。

しかし、担任の

「神風君。自己紹介をして貰えますか？」という言葉で中断される。
そして、神風の自己紹介が始まる。

「えーっと。俺の名前は、神風生です。」

と言いながら、綺麗な字で黒板に書いていく。

「それで、俺のレベル（能力値）は、……………」

「5ですっ！」

こうして、神風の学園都市でのドキドキンデレビリビリトラトラ
幻想生活は始まった。

第3話 「幻想殺しが倒せない」【学園都市】 7月19日

上条と美琴が夏休みに入る前の最後の追いかけてっことをしているころ、神風は街の中をブラブラと歩いていた。

さつきまでは、美琴や白井達と一緒に情報収集などをしていた。

何故、そんな事をしていたかというところ、実は彼の仕事に関係する。とりあえず、彼のことにについて少し説明しておこう。

まず、神風は転校生な訳だが、通常、学園都市には転校生は存在しない。

何故かと言うと、能力というのものは一定の『時間割り（カリキュラム）』を受けて初めて手に入れることの出来るものなので、途中から受けたとしても、その者に能力は発現しないからだ。

それならば、何故神風は転校生なのかというと、彼は『生まれつき能力者だから』という理由だった。

そして、色々な経緯を経てLEVEL5となる訳だが、LEVEL5の学生というのは学園都市側から見れば、大変重要な存在だ。

それは、学校側から見ても同じである。なにより、学校の名前を売るのは格好の的だ。このため私立の学校の競争が必死になった。

常盤台中学が、女子校をやめて神風を受け入れたのは、そういう背景があるのだ。

つまり、彼は特待生として常盤台に入っている。

かなり、というかすごくいい待遇で入学しているのだが、細かいことはまたの機会に説明しよう。

しかし、その代わり結構面倒臭い仕事を課せられていたりする。

まあ、神風はそれを面倒臭いとは思ってなかったりする時もあるのだ。あ

るのだが…。

彼は、T J Aという称号を持っている。
正式名称は、Top of Judgment and Anti skillという。

ジャッジメント
アンチスキル

つまり、風紀委員や警備員の上に位置している存在なのである。そんな、神風が夜の街を歩いていると。遠くのほうで、大きい雷が落ちた。

「デカイ雷だなー。」

と、いいながら手をあげる。

あの雷のせいで、ここらへん一帯は停電するかもしれない。それを防ぐために、神風は雷の一部を……

『吸収』した。

第4話「炎の魔術師（ステイル・マゲヌス）」 7月20日

今日も神風は街を歩く。

確かな目的があつて行動している訳ではないのだが、彼は案外この街を気に入っていた。

そのため、こうして毎日ブラブラしている訳だが、

（ハア……。なんかステキイベントでも起こらねえかな。）

とか、思つて歩いていたりする。

彼は、これでも健全な中学生だからこんな事思つのは当たり前なのだ。

今日の中学生なんてこんなものである。ちなみにこれが、上条や青髪ピアスぐらいになつてくると更にスゴイ事になったりする。

そんなこんなで道を歩いていると、上の方から爆発音が聞こえてきた。

少々うんざりした気持ちでトラブルに巻き込まれやすい体質なのかなあ、とか考えながら、それでも神風は走り始めた。

エレベーターは面倒臭いので、『風』を使つて一気に上まで上がる。何故か、状況判断をする暇も無く炎が神風に襲い掛かつて来る。

それを、左手をあげて『吸収』する。

正確には『炎』ではなく、『炎のエネルギー』を。

そうして炎を消し去ると驚いた目をしてこちらを見ている白人がいた。

しかし、白人と言っても普通の白人には到底見えない。

髪を赤く染め左目の下にはなにやらバーコードのようなものがついている。

両手には、毒々しい銀の指輪をそれぞれの指に一個ずつはめている。

また、その身長は2mを超しているが、顔立ちはまだ幼い。
神風もその青年を睨み据える。

そして、さつきチラツと視界に入った人物に対して一言いう。

「当麻。こういう事がある時は、俺を呼べて言ったる。」

しかし、返事が返ってこない。その代わりに、不幸な少年・上条当麻の絶叫が返ってきた。

ハッ・・・？と思い神風は振り返るが、そこにいるはずの上条はいない。

どうやら、飛び降りたらしい。

とりあえず、上条の安否を確認したい神風だが、魔術師はそれをゆるさない。

いきなり炎剣を手にして斬りかかって来る。

神風は、それを左手で受け止め、炎剣を消す。

そこから、右手を相手の方へ突き出すと魔術師は車にでも撥ねられたように吹っ飛んでいった。

驚きの表情を浮かべているが、あまりダメージは喰らっていない様だ。

「全く。能力者っていうのはみんなこんな奴等ばかりなのかい？」
と、少々呆れた感じで問いかけてくる。

「いんや。別にそんなことはないぜ。俺や当麻がちよっと特別なだけだ。アイツは特にだけどな。」

「まあ、別にどうでもいいんだけどね。っと、そういえば君にはまだ名乗ってなかったね。」

「おいおい。戦う相手には一々名前乗るのかよ。」

「ちがうよ。ただの名前じゃないよ。『魔法名』っていうんだ。」
と、魔術師は坦々と言葉を紡ぐ。

「僕たち魔術師は魔術を学ぶときにそれぞれの覚悟を決め、自分の

魂に刻み付ける。そして、敵と闘う時にはこれを名乗るんだよ。」

そして、何かを準備するように間を置く。

「Fortis931!!」

その声と共に辺り一面に炎が広がる。

「魔女狩りの王」
イノケンティウス

という、もう一つの叫びによりどこからともなく炎に包まれた人型の何かが現れる。

「だから、なんどやっても同じだったの!」

神風は、左手を突き出して魔女狩りの王の一撃を止める。いや、その腕や胴、脚に至るまでを消し去る。

しかし、魔術師は不敵に笑う。それを訝しげな表情で神風が見ていると。二人の間を遮る様に魔女狩りの王が復活する。

「なっ……!!?」

と、驚きの声をあげながらもまた消滅させるが、更に復活してくる。そんなことの繰り返し、かなりの時間行われ中々神風は魔術師に近づけない。

しかし、一つの音がその状況を一変させる。炎の爆音に遮られている魔術師には絶対に届かない一つの音。

しかし、その音を聞いただけで、神風には分かる。誰がどんな目的でここに来たのか。

それは、エレベーターがついた事を知らせるピンポンという音だった。

それなら、自分に出来る事は一つしかない、と神風は決意する。

そう。自分の仕事は、今自分の後ろに立っているこの馬鹿をあの魔術師の所まで送り届ける事だ、と。

神風は、魔女狩りの王に向けて右手を突き出す。

すると、魔女狩りの王はかなり大きく真っ二つに切り裂かれる。そ

の状態を維持しながら神風は叫ぶ。

「行けっ！当麻！」

それを聞くよりも早くツンツン頭の高校生は走っていく。

魔術師に向かって真っ直ぐに。

そして、呆けた顔をしている魔術師の左の頬を目一杯の力で殴り飛ばした。

第5話 「完全記憶能力」 7月21日

静か過ぎる、と神風は思う。

確かにまだ部活などで帰ってきている生徒が少ないのは分かるが、それでも誰かは気づかなければおかしい。

そんなことを思っていると、まるで栓を切ったように人が集まりだした。ちょうど今あの炎の魔術師を倒したところだ。そうすると、あの魔術師がなんらかの魔法を使っていたという事が一番考えられる。

と、そんな事をダラダラと考えていると、

「インデックス!!」

という上条の叫びが聞こえた。

インデックスってなんだよ・・・？と、少々呆れ顔で上条のいる方に顔を向けると、

血まみれの少女が倒れていた。

とりあえず、上条と共にその少女の下へ駆け寄る。

しかし、間近で見ると良く分かった。その少女の背中は大きく斬られており、今も血がかなり出ている。そして、その血で少女が着ている真っ白な修道服を染めていた。

「当麻。こりゃ、どういうことだ？」

と神風は上条に問う。

「しる・・・かよ・・・」

と小さな声が返ってきた。

「とりあえずこの子を下に移そう。」

「ああ・・・。」

上条は血まみれの少女を抱えて神風と一緒にマンションの下へと降りて行った。

必死に警備員を誤魔化した神風は、とりあえず自分の家へと帰った。
アンチスキル
どうやら、その少女が言うには誰か魔術を使える人がいればいいという事で、上条にはアテがあるらしく、その少女を抱えて何処かへ行ってしまった。

しばらく歩くとあるホテルが見えてきた。

そのホテルの一室が神風の『家』だ。

流石に学校は一緒でも寮まで女子と一緒にする訳にはいかないらしく、かといって男子一人の為に寮を造るのもアホらしいということ
で、神風にはその一室があてがわれた。

流石は常盤台中学。ホテルとはいっても普通なら一泊十数万円する
超高級ホテルなのだ。

こういう事を始めたとした様々な特待制度を神風は受けている。

例えば、授業料、入学金などの免除。生活費の支給などなど・・・。
更に神風の部屋にあるパソコンの端末は「A」だ。

と、そんなリッチな暮らしをしている神風は、帰ってくるなりパソコンへと向かう。

パソコンの画面を見つめるその目は真剣そのものだった。

駄目だった。

神風は徹夜しながらかなりの間『魔術』について探っていたのだが、
『魔術』の存在は片鱗も無かった。

だが、正直それも仕方ないと言える。

普通の人ならまず信じないし、「科学」が「オカルト魔術」の存在を認めている事自体が異常なのだ。

しかし、神風はこの目でしっかりと見ている・・・炎の魔術師

が魔力と言う物を練り上げているその瞬間を。

その時、神風の携帯電話が唐突になった。メール着信を知らせる「LEVEL5 - judgement」のメロディが聞こえる。確認するとそれは風紀委員からの緊急要請だった。

神風は現場に向かって走っていた。

その途中で「SEED」を発現させる。

「SEED」というのは、See Energy Essence Define。「世界の真髄を解き明かす瞳」と言う意味だ。

この『能力』は、全てのエネルギーを見極めるというものだ。神風がステイルの魔力を『見る』事が出来たのはこの能力のおかげだ。これは、神風の本当に生まれつきの『能力』だ。

つまり、もう一つの神風の能力は生まれつきではないということなのだ。

更にこの『能力』は、学園都市で開発される能力とは全く違う。言うなれば、上条の能力に近いかもしれない。

そして、神風は『見た』。人払いの魔術が辺り一面に広がっているのを。だから、神風はその魔術のエネルギーを吸収しながら進む。しばらくすると、上条を見つけた。しかし、一人ではない。白いTシャツをおへその上で縛り、左足の方だけが極端に短く切られたジーンズを履いた女性という。

いや。『いる』という表現は適切ではないかもしれない。

上条はその女の魔術師にやられていた。それも、一方的に助けに入ろうかと思っただけ、なんとなく本能的に近くの電信柱に隠れる。

上条と女の魔術師は話していた。それを、神風は聞いていた。それを、聞いた神風は驚いた。

神風はあの少女の事を全然知らない。

しかし、二人があの子の事について話しているのはすぐに分かつ

た。

だが、神風が驚いたのはそこではない。その話の内容の方だ。色々悩んでいた神風だが、ハッと我に返る。

上条がその女の魔術師を倒れ掛かるようにして倒れた。

そこで、ようやく神風は出て行く。上条の下へ。

そして、上条の体を担いで女の魔術師に言う。

「コイツは、きっと抗うぜ・・・。」

女の魔術師は何も答えなかった。

第6話「禁書目録（インデックス）」 7月24日

目を覚ます。

そして、神風は思う。今日が『最終日』だと。

そう。今日が『最終日』だ。あの少女が生きていることができる日は。

そんな事を頭の中にしっかりと留めながら神風はこの三日間調べ上げてきた。「魔術」について。

魔術とはなんなのか。しかし、ここは科学の総本山だ。そんな物が見つかるといけないと、正直思った。

実際、神風の部屋のパソコン 端末「A」の代物 を

もってしても、「魔術」などという単語は一切出てこなかった。

しかし、神風はそこで調べることがをやめはしなかった。

自分の能力をフル活用して、端末「S」の領域にまで侵入する。

そして、そこには載っていた。

いや、存在その物が当たり前として載せられているモノも多くあった。

ここまで見つけることが出来て神風は目的を達成することが出来た。

・・・ハズだった。

しかし・・・と、神風は思う。

何故科学の最深部にそんな正反対の魔術オカルトが埋まっている？

おかしい。おかし過ぎる。

しかし、そんな事も吹き飛ばすような事が載せてあるページがあった。

ページのタイトルは「魔神」。

どうやら、魔術を極めすぎて神様の領域にまで足を突っ込んでしま

つた、ヒトの事をさすらしい。
そこには、いくつかの例が載っていた。その中の一つに神風は目を留める。

そこに書いてあった人物名は

インデックス
禁書目録。

しかし、今はそんなダラダラと事を考えている暇はない。

「SEED」を発現させながら、神風は夜の学園都市を走る。上条当麻の下へと。

上条は意識不明のままで、月詠小萌のボロアパートにいる。つまり、神風は小萌先生の家へと走っていた。

そんな時、前方に見慣れた少女を確認する。

そして、確認して…………、

確認して…………、

確認して…………、

そのまま素通りした。

そうしたら、なんと雷撃の槍が飛んできた。

「ちよつと待ちなさいよアンタ！なに街で会ったクラスメイトに一言も声を掛けずに全力で走ってシカトしてくってどーいうことよっ！」

と、いいながら前髪の間からバツチンバツチンと紫電を散らせているこの少女は確か……

「美琴……？」

「なんで疑問系なのアンタ！？クラスメイトの顔と名前も覚えられない訳！？」

「いや、覚えてるけどさ……。」

「んじゃ、なんで今アタシをシカトしたのよ？」

「だって、今明らかに声を掛けるような雰囲気じゃなかっただろっ！お前だって俺と目が合った後にすぐめを逸らしたしっ！」

「だけど……。こういつのつて普通男から声を掛けるもんじゃない！」

「それは、明らかに解釈の仕方が……。ハっ！こんな事をしてる暇はなかった！とりあえず、じゃなっ！美琴っ！」

「あっ……。！ちよ、チョット待ちなさいってば」

と言っている美琴を置き去りにして神風はまた走り出す。

魔術師、ステイル「マグヌスは見た。」

あの少年に放たれている「竜王の一撃」ドラゴンプレスが、自分と神裂の方にも放たれるのを。

（ボクはこの子に殺されるのか……。）

と、後ろ向きなことを考えている間にも竜王の一撃がステイルの下へと迫る。

しかし、そんな自分の目の前に現れる何者かをステイルは見た。

左手を前に突き出す。

たったそれだけの動作であの「竜王の一撃」ドラゴンプレスが消し飛んだ。しかし、

（クッソッ！！エネルギーがデカ過ぎる。このままじゃ俺の方がパンクしちゃうっ！）

そして、辺りをキョロキョロと見回す。

そして、右腕を上へと向ける。

そして、神風の右手から左手から吸収されているのと全く同じ物が飛び出した。

その青白い閃光はとある人工衛星を撃ち落とす。

この一件がとある少女をとて悩ませる事になるのだが、、、、

それはまた別の話。

よって、神裂とステイルは神風によって助けられた。

なんだか、よく分からない状況になっているが神風はそれを無視する。

そして、今自分と同じような攻撃を受けている少年に声をかける。

「おい、当麻。大丈夫か？」

「大丈夫じゃねえよ。見た目どおりだ。」

と、そのとき何かのカードが部屋中に広がった。

ルーンのカードだ。

上条もそれを確認したらしく、なにやら魔術師達とベラベラ喋り出した。

そしていつかの、炎の巨人が顕現する。上条を庇う様に。

上条は走り出した。一人の少女の下へと向かって。

確かに、たった一人の少女を助けるようなヒーローになってみたいと、神風は思う。

ただ、と神風は思った。

「さっさと助けてやれ！当麻！！」

ただ、今回その役はお前（当麻）でいい。

第7話「記憶喪失」 7月25日

ここは、学園都市にあるとある病院だ。

ここには、現在上条当麻が入院している。

とある少女のとある一撃によって。

肝心な上条の症状とは……

「こんなのつてあるかよ……っ！」

記憶喪失。

どうやらカエル顔の医者が言うには、そういうことらしい。

今はインデックスというその上条が記憶を失ってまでも守ろうとした少女が面会している。

きっと、その少女は絶望するだろうと、神風は思った。

しかし、上条とその少女の話を立ち聞きしていた神風は驚く事になる。

（ハハッ……。やってらんねえよ……。）

なんと、記憶を失っているはずの上条がその少女の笑顔を守るためにだけに嘘をついたのだ。

（この世界には、こんな奴も……。こんなに馬鹿な奴もいるんだ。）

きっと、だぶん、世界で一番優しい……。いや、強い嘘を。

（まったく……。）

だからこそ、神風は思う。

やっぱり当麻あいつは強い、と。

やっぱり当麻あいつが英雄ヒーローだと。

第7話「記憶喪失」 7月25日（後書き）

これを読んでくれている方、

初めましてdragonsという者です。

こんな、文章もまともに書いていない作品を読んでもさり、本当に感謝の気持ちで一杯です。

さて、このとある次元の超独立機動兵装ドラグーンですが、起こる事は基本的に本編と同じです。

まあ、大分省略されていますが。

しかし、たった一つだけ違う事があります。

言うまでもなく、”神風生”の存在ですね。

この物語は神風の視点で描かれて行きますが、

今回の「禁書目録編」では、ただ、上条の仲間が増えただけという感じでした。

つまり、脇役です。

しかし、次の「欠陥電気編」では、違います。

えっ？「吸血殺し編」はどこにいったのかって？

すみません。あの物語は神風を登場させる機会がなく、とばさせて頂きます。

姫神ファンの人、申し訳ありません。

これからも、とある次元の超独立機動兵装ドラグーンの応援をよろしくおねがいます。

感想、書き込んでくれると嬉しいです。

第8話「御坂妹」 8月20日

確かに友達がたくさん出来ればいいと思った。

欲を言えば、彼女の一人でも出来て充実した学園生活を送っていければいいと思った。

だけど、………違っ！

「別にこんな展開を望んでたんじゃねー！」

という叫び声と共にとある少年が、学園都市の第七学区、常盤台中学の通学路を駆け抜ける。

確かに学校に遅れそうな生徒が街中を全力疾走するのはこの街ではよくある光景だ。

しかし、神風のその光景は誰がどう見てもおかしい。そして、その原因は神風の背後にある。

「きやつ。神風君、お待ちください。」

「神風様　！！」

「止まってくだされー。」

という、黄色い声が聞こえてきている。一方、神風は

「すみませんが、無理ですーっ！」

と言い後ろを振り返ると、常盤台以外の制服もチラホラ見受けられる。

（何故だーっ！？）

と思いながらラストスパートをかける神風だった。

「ちよろつとー？」

という声が掛けられた。この声は多分……

「………美琴？」

「なんで疑問系なのよ！？アンタは！？」

「うげっ！？頼むからビリビリだけは勘弁してくれ！俺はさっきまでオンナノコ達に追い掛け回されてたんだ！スッゲー疲れてんだよ！」

「ほほう……。今日も追い掛け回されてたんだ……。へえ……。」

「え？うえ？俺は墓穴を掘っちゃった系ですか！？」

とか言っていると、美琴の前髪からビリビリッ！と、電撃が飛んできた。

「ハアー。全くなんであの馬鹿もアンタもアタシの電撃が効かないのよ？一人は無能力者（レベル0）、もう一人は超能力者（レベル5）とはいえ、学園都市の第八位のくせに。」

「俺には俺の能力があるし、アイツは幻想殺し（イマジンプレイカー）があるからなあ。相性だろ。あいしょー、あいしょー。」

「なに？その適当な感じ。あれあれー？神風生クンはもう一回美琴サンの電撃を喰らいたいのかなー？」

「ぶっ！！ムリムリッ！もうそれは勘弁しといてくださ……。ん？」

「どうしたのよ？」

「いや、アレ……。」

と言って神風が指を差した方向には、金を飲み込むクソヤロウな自動販売機と格闘している少年がいた。

上条の二千円を飲み込まれたという話に美琴と一通り笑い転げた神風は美琴の電撃のせいで煙をあげている自販機をしばらく見つめていた。

どうやら、二千円が返って来たのではなく、缶ジュースがきたらしい。

美琴は、「ヤシの実サイダー」、神風は「葡萄シチュー」を貰って

いた。

そんなこんなで、白井黒子が来て「二対一ですよ!？」とか言いながら壮絶な勘違いをしながら去っていった。

まあ、しかし傍から見れば白井でなくてもそう見えただろうから白井の行動はしかたがないとも言える。

更に神風・美琴・上条の三人でダラダラしていると、

「お姉さま？」という声が聞こえてきた。

一番早く反応したのは美琴だ。しかし、なんかいつもの美琴の反応と違う気がするが、多分気のせいだろう。とか思いながら神風も後ろを振り返る。

そこには、美琴と全く同じ顔をした少女がいた。

どうやら美琴が言うには双子の妹らしい。しかし、あまり仲が良くはない様だ。なんか神風や上条から離れて口喧嘩っぽい事をしていく。

そこら辺にポツンと残された神風と上条はなんとなく会話を始める。

「そういえば、当麻『アレ』からどうなんだ？」

「いや、記憶はやっぱ戻ってねえよ。」

「そうか・・・まあ、そっちの方はなんとかなんだろう。俺が聞きたいのはそっちじゃなくて、インデックスとの事だよ。上手くやってんのか？」

「あー。頭噛み付かれています。ハイ。」

「ふーん。そうか。まあ、それも俺が口を出す事じゃないからな。」
神風と上条がそんなはなしをしていたら、美琴が帰ってきた。

（あれ？そういえば、美琴って妹とかがっていたっけ？超能力者（レ

ベル5)の妹ともなるともうちょっと有名になると思っただけだなあ。)

しかし、このままダラダラしている訳にもいかない。

上条は自分の学校へ。神風と美琴は常盤台中学へと走って登校していった。

そんな神風と美琴が常盤台中学どころか「学舎の園」中でウワサさされている事をこの二人はまだ知らない。

「ハアー。今日も一日ちゃんと疲れましたよっと・・・。」

という、全くやる気のない声を出している少年、神風生は現在、常盤台中学からの下校中であつた。

やつてもあまり意味の無い授業を受けるというのは、正直、結構面倒くさいものである。

それでも、ちゃんと通っているわけだが。

そんな時、後ろから誰かに声を掛けられた。

美琴だ。

「ハアー。またビリビリショータイムか・・・。」

「分かったわよ。今回はビリビリは勘弁してあげるから、そんなやる気の無い溜息つかない！」

「へー。へー。分かりましたよ。あん？つーか、お前わざわざ後ろから追いかけてきたのか？」

「なっ！そんなわけないでしょうが！なんで、アタシがアンタなんかを追いつけてこなきゃいけないのよ！？アンタの歩くスピードが遅いだけでしょう！」

「ハアー。これが今時・・・じゃないけど、ウワサのツンデ・・・。」

・・・。うわっ！いきなりビリビリ飛ばすんじゃねえっ！！お前、ホントに一步間違えたらモロ直して神風さんは撃沈の件ですよっ！」

「あ、アンタ！次その単語言ったら殺すわよ！」

「ん？その単語って？ツンデ・・・。うつつつつがあああああ！！言つたそばから何やってんだよ！」

「そっちこそ言つたそばからなに言つてんのよっ！」

と、ぎゃあぎゃあと騒ぐ神風と美琴だったが、そのときそばに近寄ろうとしていた一人の不幸な少年（両手には缶ジュースの山）が一番とばつちりを受けたと言う。

それから、美琴と別れた神風と上条が一緒に帰っていた。

しかし、美琴がいなくなつて初めて、男二人の下校はむさ苦しいという事を実感している二人だった。

そんなこんなで、歩いている内に上条の家の近くまで来ていた。

何故か、そこで気合を入れなおす上条だったが、直後テニスボールを踏んづけてすっころんだ。

さすがにここまで磨きがかかると、呆れを通り越して憐みの情しか出てこない。そういう眼差しを上条へと向けていると、

「どうしたのですか、とミサカは疑問を口にします。」

という変な口調が神風の背後から聞こえてきた。

「えーと、美琴の妹だよな？」

「美琴……。ああ、お姉さまのことですか。と、ミサカは確認します。」

「いや、他に誰がいるんだよ……。」

「そんな事より、とミサカはもう一度尋ねます。どうしたのですか？」

「そんな事よりつてお前……。まあ、いいや。見りゃ分かるとおり缶拾つてんのよ。」

その後、御坂妹は……。という沈黙と共にその場へ腰を下ろした。

なんだかんだで拾うの手伝つてくれんのかー。イイ子じゃん。という適当な判断を下して神風は御坂妹を見ていると、

「ぶッ!!」という、はしたない音を出す少年が二名程存在した。

「何故に白と水色の縞パン……。ツ?」、と神風が言えば、

「なんだよっ!?これっ!?なんで俺の角度からだどギリギリ見えねえんだよ!これも私、上条当麻の不幸体質のせいですかー!?」、と上条がご乱心となった。

しかし、最後まで首をかしげ続ける御坂妹に急に罪悪感を覚える二

人
だ
っ
た。

御坂妹と一緒に十八本もの缶ジュースを運んだ翌日。

神風は、例によって学園都市の中をブラブラとしていた。

そして、今日の事を思い返していた。

（なんか、今日美琴が変だった・・・よな・・・？）

となんとも曖昧な事を思い返していた訳だが。

しかし、今日は確かに美琴の様子がおかしかったのである。

いや、今日だけではない。ここ最近ずっとそうなのだ。

更に、

（なんとなく、俺に対してだけあまりにも反応が異常過ぎた様な・

・・・え？俺ってまさか美琴に嫌われてる？イヤ、そんな事はな

い！あの幻想御手事件の時や能力体結晶事件の時だって一緒に闘つ

たじゃねえか。うん。大丈夫だ神風生！お前が嫌われてるなんて事

はない！・・・イヤ、・・・やつぱ・・・）

とそんな事を考えていた神風だった。

しかし、神風のその予想は外れてはいなかった。

6日前・・・・・・・・

8月15日。

それはとある少女、御坂美琴が初めて自分のクローンと会った日だった。

木の上で危険な状況だった黒猫を二人で助け、稼ぎが無いと妻に縁を切られると嘆いていたおっちゃんにアイスクリームをおごっても

らい、何百回やったか分からないガチャガチャで獲ったカエルのピンバッジを妹へとあげ、二人のなんらかの関係が多少は芽生えた・・・ハズだった。

いや、確かに友情、愛情、などのつながりは出来たのだろう。

しかし、それはもつと大きな力で簡単に打ち破られる。

絶対能力者（レベル6）^{シフト}進化実験。

御坂妹の使命は学園都市の第一位、^{アクセラレータ}一方通行を絶対能力者（レベル6）^{シフト}へ進化させる事。

つまりは、御坂妹が殺される事なのだ。殺されるためだけに生み出される命。

それこそが、御坂妹だった。

そんな御坂妹は一方通行との戦いに赴き・・・、瞬殺される。

それもそのハズだ。一方通行の能力は「向き（ベクトル）変換」。その中で最も簡単な『反射』を使って相手の攻撃をすべてはじき返す。誰も勝てるハズがない。

そして、行動不能になった御坂妹は脚を千切られ、コンテナに押し潰される。

それを見ていた美事は一方通行へと戦いを挑んで行った。

しかし、とある一人の少女を除いて誰も気が付きはしなかったが、介入に入った人物はもう一人いた。

神風生だ。

御坂妹の下へと真っ先に駆けつけた神風は、落ちてくるコンテナを自分と御坂妹のスペース分だけ、分解して押し潰されるのを防いだ後、御坂妹の脚を・・・

繋げる。

そして、御坂妹の生命エネルギーを増やす。

口で説明すればこんな感じだが、実際見ていたらいくらここが学園都市だと言っても信じられるものは少ないだろう。

それ程までに異常なのだ。

しかし、神風はそんな事は気にしない。気にしている暇はない。

この『治療』にかかった時間は、実に7分19秒。

美琴を放っておく訳にはいかない。

神風が御坂妹に『治療』を行っていた間、美琴は一方通行と闘っていた。

攻撃は全て「反射」されるわけだが……。

自分の事を実験動物と呼ぶ妹達^{シスターズ}。

そんな、少女らの介入によって美琴は一方通行に殺されずに済んだ。そんな、絶望に打ちひしがれている美琴の前に神風が現れた。

その存在は美琴にとってヒーローに見えた。しかし、美琴はそんな思いと正反対の行動を取る。

おい、と神風が背中を美琴に向けたまま切れ切れに呟く。

「だ、い……じょう、ぶ、か？」

その声を聞いて美琴の心境は複雑な思いに囚われる。

この少年と今まで通り事件を共に解決していく道も数ある選択肢の中には確かに存在する。

しかし、『コレ』はどう考えても今までの事件とは規模が違う。

そう。いくら超能力者（レベル5）だからといってナンバーエイトのこの少年をこんな事件に巻き込む訳にはいかない。

その少年の頭の横に手を置く美琴。

そして、両手の間に電気が走る。決して強過ぎはしないが、意識を奪う程度には電気が走っている。

「ありがと……。……ね。」

きつと、もう聞こえていないであろう神風に美琴は言った。

美琴は、なんとなく分かつている。この少年に、多分ここ二・三日の記憶が無くなる事を。

そっという風に美琴が細工したのだ。

そして、美琴は学園都市の深い闇へと歩を進めていく。

たった一人で・・・・・・

「俺と上条と御坂妹」 8月21日

そんな事があり、神風生は御坂妹と会った記憶を忘れる。

そんな事があり、御坂妹は生き残る。

そんな事があり、御坂美琴は学園都市の闇へと足を踏み入れる。

しかし、そんな事があっても上条当麻の日常は変わらない。

そして、それでも世界は回る。どこの誰がどんな事をして何をされようがみんなに平等に時間が与えられ、その時間を過ごして行く。それが、それこそがどうしようもない『世界』というものだった。

「いやー。だからさ、俺は思うわけよ。」

と、神風は話し出す。

「俺さ、俺ってさ、お前や美琴との遭遇率かなり高くね？」

神風は「メロンメロンメロン!!」の缶を右手で持ち、その右手の人差し指で上条を指しながら言った。

上条はそれに深い溜息で応じる。

「つまり、不幸である当麻と、ビリビリ中学生の美琴。この二人との遭遇率が高いって事は、俺って結構危険だよな？」

と言っていると、

「んで、それを張本人の俺に言っただうする訳？」と、間髪いれずに答えられた。

「いや、どうするって程でもねーけどさ。」

そんな事を話していると、常盤台中学の制服が見えた。

「ん？おーい！美琴かー？」

と、いう神風の言葉にその少女は反応した。

「違います、とミサカは即答します。」

「あー。御坂妹の方かー。何やってんの？」

「見て分かりませんか？と、ミサ力は問いかけます。この猫にエサを与えている所です。」

「んー。そうか。まあ、がんばれー。」

「待ちなさいと、ミサ力は静止を呼びかけます。アナタはここに捨てられているこの猫を見てどうも思わないのですか？」

「どうも思わないのかって・・・、可愛いとは思っけどさ。」

「捨て猫なのですよと、ミサ力は指を指します。飼うといった発想は浮かばないのですか？」

「別に・・・、お前が飼うんだろ？その猫。」

「・・・・・・ミサ力の居る環境下では猫を飼う事など出来ないのですと、ミサ力は答えます。」

「そんな俺だって無理だって。つか、当麻は・・・・・・。つうおおおおおおおおおい！なんでそんな高速で首振ってんだ！！そんな思いつき拒否しなくてもいいじゃねえか！」

で、そんなこんなでもう一匹猫を飼っている上条にはこの猫を飼うと家計が崩壊する事が判明。で、そんなこんなで黒猫の飼い主は神風に決定。（「オレが飼うのかよ！？」）（本人談）

一件落着。めでたしめでたし。テンテン。

その後は、猫の本やらを買う為に本屋へ直行。

店内にいる神風達には分からない事だが、この時御坂妹は殺人現場にいた。

第12話「御坂美琴の居る世界」

中古本販売店で、猫の飼育法と牛肉のおいしい食べ方の本が隣に並べられている事に神風がうろたえている時……。

上条が本屋に飽きて先に帰ると出て行った時……。

一つの戦いが、いや、殺戮が幕を開けようとしていた。
ワンサイドゲーム

しかし、神風が目当ての本をレジへと運ぶ時にはその殺戮はもう完了していた。

アクセラレータ
御坂妹は一方通行に、ほんの十数秒で殺害された。

「おつまたせ。」

神風はやけに高いテンションで店内から出てきた。

「いやー、なんかポイントカードで全部まかなえたから出費が少なくて……、アレ？」

居ない。この店の外で自分を待っているはずの御坂妹がどこにも。

黒猫だけをもう夜になった街へと残して御坂妹は消えた。

なんだか妙な胸騒ぎがする。女の子を一人で夜の街にうろつかせる訳にはいかない。

「んー。オンナノコが一人でどっか行っちゃまうとしたらココしかないよな。」

と、いいながら路地裏への入り口へと立つ神風。

なんだか色々間違っている気がするが、今は横に置いておく。

そして、神風は路地裏へと一歩足を

踏み出して……、

踏み出して……、

踏み出して……、

神風の足が止まった。

神風の嗅覚があるものを捉える。

それは、鉄のツンとした臭いでもあり、内蔵と筋肉がグチャグチャにミックスされたような臭いでもある。

更に、強烈なフラッシュバックのようなものが神風に襲い掛かる。込み上げて来る吐き気を必死に抑えようとする神風だったが、入り口では暗くて見えなかったモノが……見えた。

壁にまで飛び散る血と誰かの吐瀉物が、腹の辺りから引きずり出された内臓が、一目で絶命したと分かる御坂妹の死体が、見えてしまった。

血だまりの中にマーブル模様を描く吐瀉物だけが多くなった。

分からない。何も分からない。

神風はそう感じていた。

御坂妹が殺された理由も。

路地裏から逃げ出すように出て、アンチスキル警備員を呼んでいる間にその死体が無くなった理由も。

だけど、分かる事は一つだけあった。自分はきつと美琴に今すぐ会わなければならない。

結局、美琴は寮にはいなかった。

そして、白井は今起きている事を知らないみたいだった。

少なくとも、神風にはそう見えた。

なんだか、あの殿方もナントカカントカと言っていた様な気がするがそんな事は気にしている暇は無い。

美琴を探すために神風は夜の学園都市を走る。美琴に会う事に恐怖を感じながらも、一国も早く見つけ出すために「SEED」を発現させる。この「SEED」で見えるものは全てのエネルギー。つまり、人の存在という非常に曖昧でオカルトチックなものも見えている。その人それぞれで全く違う『存在のエネルギー』の中から美琴の物を見つけ出す。そして、走る。その姿は淡々としたものだったが、神風は全力で足を動かしているつもりでいた。心は前へ、前へと進むのに体はその場所へと近づく事を拒んでいる。まるで、脳から出た命令の電気信号が弱くなってしまったような。そんな感じだった。

しかし、物事には終着点がある。そして、神風の終着点はすぐそこにあった。

能力を駆使して美琴の居る地まで辿り着くのにかった時間は、19分。

しかし、神風はこの19分を数時間にも、いや、十数時間にも感じていた。

しかし、必死の思いで辿り着いたその場所へ神風は踏み込んでいく事が出来なかった。

そこには、先着一名様限定の特等席「ヒーロー」の座に君臨する少年がいたからだった。

第13話「許せないモノ」

雷が落ちる。上条当麻の下へと。

見た目は確かにデカイ。しかし、「SEED」を使用してその雷を物陰に隠れて見ている神風にはなんの問題でもない。

現に上条は起き上がり始めている。しかし、その当事者たる美琴はそれを驚愕の目で見ている。つまり、本人にはそんなつもりは無かったというわけだ、今の雷の異常な程までの電流の小ささは。

そう。今美琴が上条に落とした雷は、その電圧に比して電流の方は驚くほどに小さかった。

そのため、見た目ばかりが大きくなり、上条は感電死することはなかったというわけだ。

しかし、どうやらさっきの美琴の反応を見るにそれは意図的なものではなかったらしい。

美琴は感情の操作が出来ないために、能力の操作も出来ていないのだろう。

しかし、それはエネルギーを見る事ができる神風だから分かる事であり、見た目は巨大な雷だ。

上条には分かるはずも無い。でも、上条はそれを防ぐ術も持っているのに防ぐ事はしなかった。

その理由は、ただ一つ。美琴を傷付けたくなかったから。

そこで、防いでしまったら美琴と“敵”になってしまうような気がしたから。

上条の気持ちは神風にも理解が出来る、痛いほどに。

だから、今すぐに美琴達の前へ出て行くことはしない。

しかし、本能的に分かっているソレを抑えられない何かがある。

（なんだなんだよ！チクショウツ！）

それは、神風の気持ち。

胸の内にしまっておこうとするそれは、神風をすぐにでも動かそう

と暴れだす。

そうして、神風がうだうだと悩んでいる間にも事態は刻々と進んで行く。

美琴の雷撃を喰らってなお立ち塞がる上条に、遂に美琴の感情は振り切れた。

絶叫。そして、落雷。

その美琴が今放った雷撃はこれまでのものとは違う。

一撃喰らえば、人は死んでしまう程の雷撃。それが、上条の下へと落ちた。

美琴もなんとなくは分かっていた。

今の一撃は上条を殺しているであろうことは。

「なんでよ・・・？なんで、私みたいな奴のために・・・っ。」

「助けたかったからだろ。お前を。」

と、神風は唐突に美琴の前へと姿を表す。

「あ、ん・・・た・・・。」

言葉に詰まる美琴だが神風はそんな事を意に介さず話をつづける。

「ああ、あとな、そいつ死んでねえから。安心しろよ。」

そこで一拍置き

「・・・えっ・・・！」

という美琴の眩きが漏れる。

「意外、って感じだな。俺は今までずっとここにいた。そんで俺の能力を考えれば分かるだろ？」

つまりはそういう事。美琴の雷が上条へと落ちる一瞬前、神風はそのエネルギーの大半を吸収していた。

「当麻の意識が落ちるぐらいは残しておいたんだけどな。」

と、神風はその場の雰囲気合わない軽いいつもの調子で話し続ける。

「アンタも、なの？」

「も、ってなんだよ、も、って。」

相変わらず軽い調子で続ける神風だったが、美琴はそれを許さない。
「アンタもあたしをつ！止めに來たのかって聞いてんのよっ！？」

美琴の体からは紫電が散っていた。

「ハッ。」

神風はその美琴の質問を笑った。

「ま、お前には関係ねえって事さ。んじゃ、当麻そいつのこと頼むわ。」

と言に残し神風は美琴に背を向け歩き出す。

「ちよっ・・・！アンタ・・・っ！」

美琴はまだ神風を止められると思った。だから神風を今ここで呼び止めた。だが、

「関係ねえよ。」

帰ってきたのは、低い声。相手を威嚇するとかそういう意志のあるものではなく、ただ感情がそのまま表に出てきてしまったという神風の声。

「お前の帰りを待つてゐる奴が居るっていうのに、その命を簡単に捨てめえてに行くバカにはなっ！！」

神風の脳裏に浮かぶのは、白井黒子や初春飾利や佐天涙子、上条当麻、そして自分。

美琴を助けるのはきつと自分のためなのだ。自分の都合で美琴を救い出したいのだ。

そして、神風は走り去る。

その背中を追おうとする美琴だったが、足が噓のように動かない。

結局、上条の下へ駆けつけることくらいしか出来なかった。

「アイツ・・・。。。」

神風は走っていた。一方通行と御坂妹の居る場所へ。

今の神風には許せないモノがあつた。

（まず、帰ったらあいつ等をぶつ飛ばそう。）

そして、自分の魂に誓つたモノがあつた。

確かに美^{アイツ}琴は言つたんだ。

“ たすけて ” と。

14話「マモル」

御坂妹はもう既に絶対絶命のピンチにあった。

実害的なダメージはそれ程無いものの御坂妹の今現在の状況は確かに“絶体絶命”だった。

それも当然だ。相手は、あの学園都市の第一位。一方通行なのだ。それに対して御坂妹は御坂美琴のクローンで異能力者（レベル2）程度しか力がない。

一方通行を目の前にして生きているだけでも奇跡なのだ。

しかし、御坂妹もただ黙って殺されるだけではない。

いくら一方通行が学園都市の第一位の怪物であつても本を糺せば酸素を吸って生きている人間だ。

そこで御坂妹は酸素を電気分解した。一度電気分解された酸素はオゾンとなる。もちろんオゾンを吸っても人間が生きるためのエネルギーとはならない。

そんな思考を経て御坂妹はこれを実行に移した。

だが、一方通行には届かない。

突如、一方通行の足元が爆発したかのように見えた。

バックステップを続けていた御坂妹に急激に加速した一方通行が肉迫する。

そして、とんつ。と御坂妹の頬に一方通行の手の甲が触れた。まるで御坂妹の頬を撫でる様に。

しかし、ばんつ。と御坂妹の頭がその手に弾かれるように後ろに吹っ飛んだ。

頭だけが後ろへと吹っ飛ばされたせいか首のあたりから、グキツという嫌な音がした。

御坂妹は地面を何回かバウンドしてやつと止まる。

そして、立ち上がるうとした御坂妹の顔へ、

一方通行の足が振り下ろされた。

御坂妹の絶叫が上がった。

しかし、何かがおかしいと御坂妹は気付く。
一方通行が思い切り足を振り下ろしたのなら、自分の頭蓋骨は割れていなければおかしい。

そんな、御坂妹へ一方通行の声が掛かる。

「お前らさア。イイ加減面倒くせエんだわ。」

なんで今更そんな事を言うのか・・・と御坂妹は思った。

しかし、その答えはすぐに出た。

「お前らの脳波って全員にリンクしてるってたよな？つまりよ・・・。」

そこで、一方通行の顔が歪む。一気に、最悪に、サディスティックに。

「テメエに耐えられねエ程の痛みを与えちまったらよオ、無駄にこの『実験』を長引かせようとは思わねエだろ？」

そして、今まで御坂妹の顔を踏みつけていた一方通行の足が、御坂妹の腹へと繰り出された。

神風生はただひたすら走る。

一人の少女をこの学園都市の闇から救い出すために。

それがどちらの少女なのかは誰にも、神風にすらもよく分かっていない。

だが、そんな些細な事はどうでもよかった。

今はそんな事を考えている暇はない。そんな事を考える余裕があるなら、もっと速く走ればいい。

今の神風には「怒り」がある。御坂美琴へ、御坂妹へ、一方通行へ、そして自分へ。

だが、

今の神風には「喜び」がある。御坂美琴へ、上条当麻へ、そして自分へ。

もうなにがなんだかわからない。

だけど、それもどうでもいい。

いままで救えなかった、救う事の出来なかった10031人のためにも、

一刻も、一瞬でも早く、

(10032人目【みさかいもうと】を助ける!!)

色々な「思い」を抱えたとある少年は、

更なる「思い」と自分の魂に刻み付けた誓いを持って、戦場へと飛び込んだ。

自分の意志で。

第15話「魔法名を名乗る理由」

(これが・・・・・・・・っ！)

神風は肌で感じ取る。

(学園都市の「戦場」か・・・・・・・・っ！)

御坂妹にも一方通行にも分からなかった。

何故、ここに関係のない少年がいるのか。そして、何故その少年は御坂妹の腹を蹴ろうとした一方通行の足を止めているのか。その両方が分からない。

なんと言ったって一方通行は全てを「反射」する、学園都市最強の超能力者（レベル5）なのだ。

本来なら、その少年の腕の骨が折れているか、少年自体が吹っ飛んでいなければおかしい。

それなのに、・・・・・・・・

「なんだア？ テメエは・・・・・・・・？」

だが、神風は一方通行のそんな問いを無視する。

「大丈夫か？ 御坂妹。」

本来、饒舌であるはずの御坂妹は途切れ途切れに喋り出す。

「・・・・あ・・・・あなたは、どうしてこんな場所に居るのですかと、ミサカは問い掛けます。ここは、あなたの様な一般人が介入する場所ではありませんと、ミサカは必死に警告をします。」

確かに御坂妹の声には必死さが感じられた。

御坂妹、妹達^{シスターズ}にとって、クローンの命の価値は低くても、オリジナルの価値は高い。

つまり、御坂妹にとって神風の命は失ってはならないものだった。ちなみに、神風が一方通行と戦っても生き残るという選択肢は存在

しない。

一般論からしても一方通行は学園都市最強の存在であり、勿論、御坂妹からの観点でもそうだった。

それ以前に一方通行に触れる事すら出来ない……ハズだった。しかし、神風はこうして一方通行の蹴りを右腕一本で受け止めている。

しかも、今はあの一方通行に背まで見せている。

常人から見たら正気の沙汰ではないと思われるだろう。

「ハッハア。オマエ、面白エよ。まさか、この一方通行にケンカ売つとして背エ向けてンだからナア！」

一方通行の言葉で神風は向き直る。

「ンでさア、結局オマエはなんなんだつつウンだよ。」

風が強く吹いた。神風と一方通行の間を。そして、神風の前髪が持ち上がった。

そこから覗く瞳には、

「いや、別になんでもねえよ。」

確固たる意志を持つてこの「戦場」に飛び込んだ少年は、確固たる意志を持つて言葉を紡ぐ。

「ただの通りすがりの泣き虫だ。」

神風は泣いていた。

それが嬉し泣きなのか、悲しいから泣いているのか神風にすらよく分らない。

ただ、自分の胸の中で様々な思いがぶつかって、なんだか爆発しているみたいだ。

しかし、一方通行は待つてくれない。

足元の『向き』を変化させたのか急激な加速をして神風の下に迫る。更に、一方通行は右手を目一杯開いて神風に伸ばしてきた。

神風はそれを反射的に避ける。その避けた神風の顔の横を弾丸の様な速さで一方通行の右腕が突き抜けた。

それでも、神風は御坂妹に喋り続ける。

「お前らは、『自分の命に価値なんてない。』とか考えてんじゃねえだろうな！？ふざけんじゃねえぞ。お前が死んだら悲しむ奴は居る。お前が死んだら泣く奴は居んだよ！もし、信じられねえっていうんなら俺が泣いてやる！お前の命の価値っていうのを俺が作ってやる！！」

最後まで泣きながら言い切った神風は、何かが吹っ切れたように前へと足を踏み出す。

「まったく、俺を相手にそんな余裕があるなんて、なんなんって聞いてんだよ！」

と、一方通行も唸りながら突っ込んでくる。

また、突き出して来た一方通行の右手を神風は掌を合わせるように強く握り込む。

その時、一方通行の顔が歪んだ。

そして、ボゴツ！という音と共に二人の少年の内の片方が吹っ飛んだ。

一方通行は自分の頬を押さえながら立ち上がった。その赤い目は狂気に満ちている。

「オマエエエエエエエエエエ！最っ高に面白エぞオ！」

と、再度突っ込んできた。

今度は、左足を後ろに下げ体重を後ろから前へ移動させた左のパンチを一方通行の鼻っ柱へと神風は叩き込んだ。

「クソがつ！調子にのってんじゃねエぞ！！」

吼える一方通行は、足元のレールを踏みつけた。それだけで、そのレールの先端が勢いよく持ち上がった。

更に、それを殴り飛ばす。

どんな力が加わったのか、持ち上がったレールは千切れくの字に折れ曲がって神風の下へと飛来する。

しかし、それさえも神風は腕一つで受け止める。

どんな攻撃を加えても一つも通らないという焦りが、恐怖感となつて一方通行を襲った。

（なんでだ！？なんで、オレの攻撃が当たンねエンだ！？）

「なんだっつウンだよ！テメエは！？」

しかし、その問いかけに対しても少年は何も語らない。

まるで、これからする自分の行動がその答えになると言わんばかりに神風は走り出す。

一方通行は、真っ直ぐ突っ込んでくる神風に足元の砂利を散弾の様に撃つ。

だが、攻撃範囲が広いはずのその攻撃も神風はかわして行く。

そして、

また一つの拳が一方通行の顔面に突き刺さった。

「コイツらだって、例え十四日間で作られた命だってなあ！生きてんだ！必死に生きてんだよ！こいつらはお前みたいな命の価値をどうとも思っていないような奴に殺されるいわれはねえ！」

今の一撃が相当効いたのか、一方通行は中々起き上がらない。

「だから倒すぜ一方通行！それが、コイツらを守る唯一の道だから！」

その時、神風の視界にフツ。と入って来るものがあつた。上条だ。そのフラフラとした足取りは傍から見ても危なっかしさを感じさせる。

「馬鹿野郎っ！来るなっ！」

その時、タイミングを見計らったように、一方通行がムクリと起き

上がる。

神風の頭に警告の鐘がガンガンとなった。

（俺は、一方通行の攻撃を防ぐ事が出来る。だけど、そのとばっちりは何処に行くかわからねえ。）

と、神風が頭を必死に巡らせている最中に、

一方通行が、

「

く

くか

くかき

くかきけこかきくけききこかきくこくけけききくかきけきこかきけきこかきけきこけききくききくききかきくこくけくかきくこけくけきききこきかか。」

その時、自然風とは思えない突風が吹いた。

神風と上条の体がその突風によって上空へと運ばれる。

高さは約30メートル。人が落ちたら十分命を失う高さだ。

「当麻っ！」

神風は手を伸ばし神風の手を掴んだ。地上までは後10メートルも無い。

（大丈夫だ。風の運動エネルギーに変換すれば、クッションとして利用できる。）

しかし、

（能力が使えない！）

そういえば、

この少年は、今自分が手を握っている少年は誰だったか。その右手にはどんな力が宿っていたか。そして今自分が握っている場所は？神風は自分の手を見る。それが握っているものは、上条当麻の右手だった。

もう、ここがどこだか分からない。

さっきまで視界一杯が光っていて、突然だんだんと小さくなっていて、最後には消えた。あれが何なのかも自分には分からない。

もしかしたら、自分の名前も分からないかもしれない。それすらも分からない。

だけど、分かる事は一つだけある。

いや、二つか。しかし、それは結局はオナジコトなのだ。やはり一つだろう。

そう、ジブンノタマシイニチカッタコトハ、

「dragoons019!!」

自分はそう叫ぶと走り出した。走り出したハズだ。走って、走って

御坂妹はその光景を見ていた。

少年は起き上がり。少しの間、フラフラと揺れ動く。

「dragoons019!!」と叫ぶ。

そして、足場を定めた様に足を広げ重心を下に下ろした。

そして、右腕を一方通行の方へ突き出す。

そこから一筋の青い閃光が迸った。

その閃光は轟つ！という唸りを上げて一方通行の足元へ直撃した。

砂煙が当たり一帯にたちこめる。

その砂煙の中を一直線に突っ切っていく陰が一つ。神風生だ。

（何故、ミサカはこんなにも胸が高鳴っているのでしょうか、とミサカは自分の感情に疑問を抱きます。）

その少年は、今、たった今、御坂妹も美琴も誰も打ち破ることの出来なかった壁を、

殴り壊した。

第16話「一段落」

さてさて、この物語は「お前の幻想をぶち殺す！」という物語でもなければ、「ビリビリさせるわよっ!!」という物語でもありません。

ついでに言えば、灼のシャナでもありません。

これは、これから神風が御さネタバレはいけませんかそうですか。

さて、この少年はとにかくどこかを歩いており、そうすると何故かトラブルに巻き込まれます。

そのため、「神風も歩けば、トラブルに当たる」ということわざが出来ていないですかそうですか。

とにかく、物語（最終話）です。

みなさんのご期待通り今日も神風は街を歩いています。

しかし、今日は特に用が無いというわけではありません。

待ち合わせです。デートです。ラブラブランデブーっ!!です。

「いや、違うし。」

神風のきれいなツつ込みも決まり、嘘だって事がバレちゃいました。
テヘッ

「.....」

そこはツつ込んでくれないと結構やばい所です。

「ん、まあ、いいや。それと作者さあ.....」

「遅いつ!」びりびり、どっかーん。

「さっきのことわざ、できてもおかしくないと思うぞ。」

美琴が放った雷撃の槍を吸収した神風だが、これは美琴を見たら雷撃が飛んで来るということが反射的にできなければ、無理な話なんです。はい。

つまり神風の中では、美琴〓危険という方程式が

「ふんっ！」びりびり、どっかーん。

「作者あ！お前が余計な事言うからまたびりびりが飛んで来たじゃねえか！」

「………あー……。さーせん。」

「なんなんだよ！その超おざなりな謝り方は！こっちは命がかかってんだぞ！」

なんだかホントに涙目だし。

「けど、神風クン。作者様に向かってそんな言葉使ちゃっていいのかな？」

「え？ちよつと待って！こんな、本編なんて無視無視　っ、みたいな所で死んじゃうのだけはいやだから！」

とかなんとか神風クンは言っていますが、これもちゃんと本編です。後半いきまーす。

所変わってというか歩いている途中です。はい。

「んで、やつと今日の主題来ました。はい。美琴クン、なんでしょっ？」

「あの馬鹿の見舞いでしょ。」

「大正解。パフパフパフ。」

「つか、すごい投げやりな感じね。アンタ、そんなキャラだったっけ？」

「最早、キャラも保ってられないぐらい疲れたんです。」

「そりゃー、いきなり途中から割り込み参加だもんねー。当の本人達を無視して独走暴走状態だもんねー。」

「別に今はそんなツンツンする場面じゃねーだろうが。お前、自分が一部の奴から何て言われてるか知ってるかツンデエえええええええええええええええっ！！」

「ただ、袋は二つあるよ。俺の分と……ああ、そういうことか。だったらこうするしかないよな。」

「む、クッキーというなら手製がベストですな。」
と、上条はそんな事を言っていました。

その後に繰り広げられる上条と美琴の壮絶な以下略。
なんだかんだで仲が良い二人を見ていると、なんだか複雑な気分になっけてしまった神風。

しかし、もう帰る時間になってしまいました。
ってことで、二人は退散。はい、上条さんの件終了。

「たくつ。アンタがクッキー両方とも食っちゃったせいで、私が文句言われたじゃない。」

「まあ、いいじゃねえか。美琴のお手製クッキーなんて滅多に食えるもんじゃねえと思ったから、ついたくさん食っちゃったんだよ。」
まるで恋人の会話ですな。けしからん。

ここで作者の恨みやひがみたつぷりの鬱憤をぶつけて差し上げよう。
「そついえばさ、アンタあの時に叫んだ『ドラなんたらかんたら』ってなんなの？」

「え、……？へ？か、かか、神風さんはそんな言葉はしらないでますることだよ。」

「また、わけわかんない誤魔化し方ね。いいから早く答えなさい。」

「俺は知らん！！」

神風、逃走中！ ハンターは美琴です。

まあ、そりゃあ言えませんよね、神風サン？

「俺が絶対お前を守る」なんて。

第16話「一段落」（後書き）

さて、この作品を読んでくれている皆様。お久しぶりです。d r a
goonsです。

これで、一旦「欠陥電気編」^{レディオノイズ}は終了です。

どうでしたか？お楽しみいただけたでしょうか？

この「欠陥電気編」^{レディオノイズ}では、”わからない”というのが、主題でした。
上条当麻とは違い、この物語の主人公の神風生はかなり悩む奴です。
今回なんか悩みまくっても結局、答えは出ないままでした。

しかし、自分のやること、やりたいことはしっかりと持っています。
たぶん、人生ってこんな感じでいいんだと思いますが、それはまだ
作者が高1の若造だからですかね？

おもしろいと思ってくれた方、ありがとうございます。感想なんか
をくれると嬉しいです。

つまらないと思った方、スミマセン。まだまだ拙い作者ですがしか
し、これからがんばって書いていくので、どうか温かい目で見守
ってやってください。

次は、神風にとある「変革・進化」？が訪れます。

第17話「絶対能力者」

神風生は中学生だ。

TOAだろうが、超能力者（レベル5）だろうが、一方通行を倒した化物だろうが、一つだけやらなければならぬことがあった。

もう一度言うが、神風生は中学生だ。それも常盤台中学の。つまり、……

今日も苦痛という名の授業という耐久レースが始まる。

「あゝ。なんで夏休みなのに授業があるんだよ。」

言い忘れていた事が一つあった。今は夏休み中である。

中途半端な時期から転入したせい、神風の夏休みは補習の山であった。

（まあ。他にも補習取ってる人がいるってのが、せめてもの救いだよな。）

今このクラスでは神風だけが補習を受けているわけではない。

他の生徒も補習を取ろうと思えば取る事が出来た。

しかし、神風と一緒に授業を受けたいがために補習を取っている者もいるという事を神風は知らない。

（だけど、問題が一つ……。）

「つかさ、なんでお前が俺の隣に座ってるわけ？そして、なんでさつきから顔を真っ赤にしてビリビリ……。」

「ええい、うるさいうるさい！真っ赤になんてなってないわよ！だいたい席のことにしたって単なる偶然でしょうが！」

「あ……。わーっだからそんなに大きい声出すなって。周りを見てみんさい。」

教室にいる全員が御坂美琴に注目していた。

授業の終了を告げるチャイムがキンコンカンと校舎全体に鳴り響く。

「やっと授業も終わりですかー。」

今日の神風に課せられた補習は全て終了した。

（だけど、こんなんでホントにレベルなんて上がるんかね？）

普通の授業というものを神風は「知らない」が、この常盤台中学で行われているものがそこまで変な授業というわけではないはずだ。

（絶対能力者（レベル6）か・・・。）

普通の学生、大能力者（レベル4）以下の学生にとって、最終的に目指すものは超能力者（レベル5）だ。

しかし、もう既に超能力者である神風や美琴にとっては、目指すものが違う。

絶対能力者（レベル6）しかないのだ。

しかし、学園都市のソレはこんな風に言われている。

「神ならぬ身にて天上の意志に辿り着く者」

それは、まるで。そう。それでは、まるで。

（まるで、なんかの信仰宗教だよなあ。）

御坂美琴は結構真剣に考え込んでいた。

（「あの日」の「あの時」、なんでアイツは止まったんだらう？）

アイツというのは一方通行のことだ。

「あの日」

御坂妹と一方通行の殺し合いの日。

「あの時」

一方通行が高電離^{プラズマ}気体を作り出し、それを御坂妹とその他大勢の妹^{シズ}タイズ

達によって止めた時。

一方通行は美琴達が邪魔したことを知り、手っ取り早く美琴達を殺そうと近づいてきた。

しかし、

その後一方通行の動きが唐突に止まった。

いや、何かに止められたと言った方がいいかもしれない。

それほどまでに不自然すぎる止まり方だった。そして、神風のほうへと一方通行は向かっていき、すでに意識も朦朧とし、ボロボロだった神風との最後の死闘が開かれるわけだが。

（アイツの能力かしら？）

しかし、神風は直接手で触れないと能力は使えないはずだ。

（そういえば、・・・）

問題の神風の姿が見当たらない。と、そこでかみかぜが教室に入ってきた。どうやら誰かに呼ばれていたらしい。

で、肝心の神風は見つかったわけだが、

神風の様子がおかしい。

驚いているというか、呆けているというか、バカみたいというか・・・。

つまり、アホ面下げているという感じだ。

そして、そのアホ面のまま話しかけてきた。

「なあ、美琴・・・。」

アホ面のまま。どこまでもアホ面のまま。

「俺、絶対能力者（レベル6）だってよ・・・。」

第18話「難を逃れてしまった人は・・・」

見たくないものを見てしまったときにどうすればいいか教えてください。

それが、いま神風生^{かみかぜいく}が欲している切実な願いだった。

神風は何故そんな問いを放ったのか。

理由は簡単だ。今、神風が見ている光景を見れば一発で解決する。

神風の目線の先にはとある一人の少女が居た。

彼女の名前は初春飾利。頭には年中無休で花が咲き乱れており、季節によってその花は変わる。御坂美琴の後輩である白井黒子とは、ジャッジメント

風紀委員第一七七支部の同僚であり、そこに先程名前を挙げた御坂美琴と佐天涙子を加えた四人は親友で、一緒に行動することも多かった。

^{レヘルアツパー}幻想御手事件などでも、その情報処理能力などを駆使して活躍している。

しかし、温厚な少女だ。いたって、温厚な少女である。

決して、決して自動販売機を蹴り倒す様な少女ではない。・・・と、

神風は思う。

えゝ、つまり何が言いたいのかということですなえ・・・

初春飾利は自動販売機へと回し蹴りを放っていた。

だれにでも心の準備というのは必要なものである。

まあ、しかし、不幸にも神風には与えられなかったわけだが。

兎にも角にも、これはどうしようもない現実だ。

（今は、中学生女子の間で”自動販買機回し蹴り大会”でも開催されてんのか！？いや、むしろそうであって欲しい！そうでないと俺の初春ちゃんに対するイメージがああああああ・・・！）

と、処理落ちする神風の脳みそ。いくら絶対能力者（レベル6）の頭脳といえど、これは解決できそうになかった。

なにか、妙な事が最近なかったかと神風は一人考える。（あの状態の初春の前に姿を現すという愚は犯さない）

そういえば、最近、おかしな力がこの世界を満たした。

魔術。『御使堕し』というその魔術は、神風のSEEDで簡単に見て取る事が出来た。

そして、自分にも降り掛かったその魔術を吸収したのだが。

その他何人かを除いては全員この魔術に掛かってしまったらしい。それが、今神風の目の前で証明されている。

この魔術は、人間の中身と外見を入れ替えているのだ。

初春が自販機に回し蹴りを叩き込んでいたのはこれが原因だろう。

つまり、あれは美琴の外見が初春になったということだ。

そこまで、自分の能力と得た情報とを使って考え出した答えに神風はなんとなく溜息を吐き出す。

こういった変な事には、

アイツ

（当麻が関わってんだよねあゝ・・・）

第19話状況判断

まあ、神風の予想通り上条が関わっていた訳だが……。

というか、関わっていたどころでなく普通に事件のど真ん中にいたのだが。

そして……、

（どういう状況だよ、コレ……？）

神風が見ている光景はあまりにも現実的だった。

それは、そうだ。神風には「SEED」というこの世界の真理ともいえるものを見抜く力があるのだから。

つまり神風の見ている光景とは、

（当麻の親父が犯人！？）

そう。この事件の犯人は神風の見ている限り、上条当麻の父親、上条刀夜その人だった。

今、刀夜は上条と話している。

どうやら、上条もこの事件について行動していたらしい。

上条がその父親である刀夜へ何かを叫んでいるのが神風にも聞こえた。

きつと、怒っているのだろう。こんな世界をかき乱すようなことをしてしまった事を。

ちなみに、神風はこの二人の前に姿を現してはいない。海岸に立っている木に身を隠し、上条と刀夜を見守っているのだ。

しかし、神風には何か腑に落ちないような気がしていた。

（このエネルギーの流れ、なんか変だ。上条刀夜本人から出てるってよりも……っ！）

エネルギーの流れを追っていった神風は気が付いた。どこか遠くから発せられる膨大な量のエネルギーを。

しかし、それをどうしようと考える前に、それは唐突に現れた。神風の背後からザリツという砂を踏みしめた時に聞こえる独特な音

がした。

その音で振り返る神風。そこには一人の少女が立っていた。

全身に纏う拘束具のような物は、足が股辺りから露出しているせいもあってか、妙な艶めかしさを神風へと感じさせる。頭から被った真つ赤な長いフードはその顔を隠している。そのフードから飛び出している金髪の髪はサラサラしていて、触りたいという神風の欲望を刺激する。

（誰だろう？あの子・・・？）

神風の頭の中は疑問符で埋め尽くされるが、本能的に、恐らく本能的に、SEEDを発現させていた。

（なんだ、アレ？て・・・ん、し・・・・・・？）

そして一つの大きな砂柱と共に「天使」の姿がブレる。

「はやつ・・・っ!？」

そして、神風は蹴り飛ばされた。

第20話「瞬間の対峙」

・・・ハズだった。

神風は、いきなり遭遇したばかりの少女のカタチをとった「天使」に吹っ飛ばされたハズだった。

しかし、「天使」が神風の顎を狙って繰り出したその足は空を切っていた。

神風を探す為に「天使」は辺りを見回すが、足を振り上げたとき一緒に巻き上げてしまった砂が視界を塞いでしまっている。

そんな自分から招いてしまった事態に「天使」は一旦思考を止めて・・・

いや、

止めてしまった。

動きの止まった天使の脚を金色に光り輝く腕が掴む。

突如砂の中から突き出されたその腕に「天使」は反応できず、なすがままに持ち上げられた。

「天使」を掴んだ金色の腕は、そのまま「天使」を思い切り投げ飛ばす。

しかし、投げ飛ばされた「天使」は地面に接触したかと思うと、大きな砂柱を上げて姿を消した。

（畜生ッ！ミスった！）

「天使」を投げ飛ばした金色に光る腕を持つ人物、神風生は心のなかだけでそう叫んだ。

天使の動きになんとか反応し、意識を失うことを防ぐぐらいには”アタリ”をズラせたところまでは良かった。

しかし、投げ飛ばすという行動は不正解だったと今更ながらに思う。というか、天使と距離を離してはいけなかった。

あくまでも、天使が狙っているのは上条刀夜だ。神風ではない。

最初に、神風に向かって突っ込んできたのは、「天使」本人と刀夜

の間に神風がいたからだ。邪魔だったからだ。

つまり、

かみかぜいく
障害物がいなくなれば、「天使」は一直線に向かうことができるということだ。

「クソッ!!」

恐らく、刀夜と一緒にいるであろう上条当麻について神風は考えてみる。

上条の右手は「天使」に通用するかもしれないが、そもそも上条自身が「天使」の動きについていくことができないだろう。

上条達の命が危険に晒されていることを強く認識した神風は、全身から発せられる金色の輝きを消し、走り出す。

学園都市にある「窓のないビル」の中、何か透明な液体で満たされたある容器の中、逆さまに浮かぶその人物は笑っていた。

神風の能力は「エネルギーの吸収・変換・放出」だ。

しかしこの人物、アレクスター・クロウリーが重視しているのも一つの能力のほうだ。

「SEED」。

それは、この世に存在する全てのエネルギー、わかりやすく言えば「力」を見ることができる能力だ。

そして、この世界は全てが何らかのエネルギー、力が働き構成されている。

この二つの事実から導き出される真実。

それは、

この世界の全てを解き明かすことができる。

それどころか、もしかしたら更に進んだ場所へ。違う世界へ、別の次元へ……。

しかし、……

それは禁忌だ。人が侵してはいけない領域の行動だ。それは「全能」であり、「神」なのだ。

決して、それを行うのは「人間」ではない。

この世の理は壊してはならない。というか、壊せないのがこれまでの世界だったのだ。

だが、今その理を壊せる人物はこの世界に二人存在している。しかも、その内の一人は意図的に壊す事が出来るのだ。

アレイスターは目の前にあるディスプレイを見て再び笑う。

幾つものディスプレイのなか点いているのは二つ。

片方は、何処かの海岸を走る少年の姿を映したものだ。

もう一つにはこういった文字が羅列されていた。

機動兵装

絶対能力完成率 3 %

SEED 覚醒率 93 %

プラン進行率 26 %

第21話「倒れない」

「・・・ゴホッ・・・！」

一つの咳と共に、神風の口内に血の味がジワツと広がる。

あの能力を使ったが故の結果。反動は神風の体へと深刻なダメージを与えていた。

神風は先程まで、天使の動きについていていた。常人ならば絶対追いつけないはずの”はやさ”に。

神風は能力を使わなくてもそこら辺に屯している不良などよりは断然強いし、もしかしたらかなりの人数が相手でも勝てるかもしれない。

だがしかし常識の範囲内で、だ。

勿論、走る速度が軽く音速を超えてしまっている天使のスピードについていけないハズもない。

一瞬だけの対峙とはいえ天使の”はやさ”についていけないには理由がある。神風だけが持ち得る理由が。

天使と戦っていた時の神風の様子を思い返してみたい。

そう。神風が全身から発していた黄金の輝き。それが、神風が手に入れた”はやさ”の正体。

この黄金の輝きを纏った神風の膂力は通常の100倍。これでもって、やっと天使についていくことが出来るというわけだ。

ただ・・・。

「クッソ！こりゃあ、・・・マズいな・・・。」

ただ、当然に反動というものが存在する。

この世界の当然の法則として強い力にはそれ相応の反動がある。壁に強くボールを投げつければその分だけ強くボールが跳ね返ってくるのと同じだ。

神風が強化したのは運動能力であって身体能力ではない。

つまり、何が言いたいのかというと。

神風の体は普通ならば動けない程にボロボロだということだ。普通の人間ならば全身の千切れた筋肉と血管の痛みで気を失う程には。「ゲホッ！・・・ごがっ・・・！！っ！！」再び咳き込み神風は思わず地面に倒れこみそうになる。

が、

前のめりに倒れこむ体の前に強引に足を引きずり出す。そんな行為の繰り返しで、神風は一步一步確実に上条達の下へと近づいていく。

ボロボロの体を引き摺りながら、しかしそれでも少しでも速くとも言う様な速さで、神風は走る。

神風はこの行動に大した意味を見出してはいない。

ただ、ただ友達を危機から助けるために前へと進むだけ。

ここにも一人何かを守る為に立ち上がり続けるものがある。

名は神裂火織。ロンドンでも十指に入ると言われている魔術師だ。

彼女もまた自分が背負う魔法名のために戦っていた。

救うのだ、全てを。あと数刻で焼き尽くされようとしている地球の半分も上条当麻も上条刀夜も、そして今日の前で相対する天使でさえも。

だから、神裂はすぐさま立ち上がる。

だって、救う為に立ち上がるのが遅くては意味がないのだから。しかし、勿論神裂によって救われようとしている天使は待たない。

振り下ろされる氷の翼。神裂はそれを切り落とす為「七天七刀」の柄を掴む。

が、刀身を鞘から出す前に・・・

その手から刀が滑り落ちた。

（・・・・・・・・・・っ！しまった！）

下に落ちた刀を拾おうにももう間に合わない。

勿論避ける事など出来ない。

神裂が死を覚悟した瞬間、全てを守る神風が吹き荒れた。

全身から金色の輝きを放つ少年は天使が振り下ろした氷の羽を腕一本で受け止めながら神裂に向かって話しかける。

「わりいな。」

その少年はニツと見るもの全員を安心させるような自信に満ちた顔をほころばせ、言葉を繋いでいく。

「ずっと任せっぱなしにしちまったな。」

だから、

「ありがとな。」

最後に、

「後は任せろ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1735p/>

とある次元の機動兵装（ドラゲーン）

2011年10月10日01時43分発行